

第 13 回 JAMS 研究大会 第 2 日目報告

鈴木陽一

日本マレーシア研究会第 13 回研究大会、2 日目午前は 3 人の方から研究報告があった。

最初の報告は、綱島(三宅)郁子氏(同志社大学)からのキリスト教聖書のマレー語への翻訳の現状とその問題点、マレー社会への影響などについての報告であった。まず、報告者の社会言語学的関心、神学的関心が述べられた後、1970 年代以降の新しい翻訳の動向を考えることの意義が示された。この時代、5 月 13 日事件以降のマレーシア全体の状況変化に加え、新しい翻訳語彙が創出され、翻訳者も西欧人から現地人へと変化したことが、具体的な用語の変化などをあげながら説明された。たとえば、それまでイブラヒムとされてきた人物はエイブラヒムと翻訳されるようになったのである。

次に翻訳者の背景、翻訳の理由について説明がなされた。翻訳者は英語・マレー語の二言語使用者が多く、マレー人が少なく、教派的には散らばっていること、翻訳の理由としてはキリスト教会のマレーシア化という意味があったこと、マレー語教育を受けた世代やボルネオ・インドネシア出身のキリスト教徒などにはマレー語聖書が必要なものであったことが指摘された。また、翻訳にあっているのは、インドネシア系やババ・ニョニャ系、ボルネオ非ブミプトラ系の人々が多いとのことであった。

もっとも、聖書の翻訳にあたっては問題ないし困難が存在することも報告された。まずムスリム側からの否定的な反応がある。彼らは、マレー語でキリスト教が語られることに違和感を覚えるだけ

ではなく、国家権力を用いて語彙の制限を行っているのである。またマレーシア化と言いつつ、多くの作業がインドネシア人頼りになっていることも問題点として指摘された。そのほかボルネオ、半島などの一部ブミプトラにおいてはマレー語の聖書は非常に重要な役割を占めているにもかかわらず、それらの教会は必ずしも社会経済的には位置付けが高くないといった指摘、これからグローバル化が進むなか、マレー語と英語の関係が不確定であるといった指摘もなされた。たゞいずれにしる、こうした翻訳の作業はキリスト教などイスラム以外の世界観や人間観をマレー世界に伝えるものであり、総じて言えばマレー語世界への貢献に繋がるものであるとの評価がなされた。

以上の報告に対しては、永田脩一氏から聖書はどの言語で書かれているのかという質問が出され、新約聖書はギリシア語で書かれているとの返答がなされた。また、イスラム教徒がコーランの翻訳をためらうにも拘わらず、キリスト教徒がその聖書をわざわざ様々な言語に翻訳しようとするのは、一体どうしてなのか、という疑問も出された。また、富沢寿勇氏からはサバで禁止された用語について具体的に教えて欲しいとの要望があり、Allah、Baitullah、Kaabah、Solat などであるとの返答があった。そのほかにもフロアーから、イブラヒムをわざわざエイブラヒムと訳し変えるのはわかりづらいという指摘、イスラム教徒がキリスト教を恐れている理由がわからないといった指摘もあった。

次に、久志本裕子氏(東京学芸大学大学院)から、イスラム学者アッタスの思想とそのマレーシ

ア社会への影響についての報告がなされた。まず、報告の対象となるアッタスなる人物の経歴、彼の思想が 1970 年代以降、マレーシアの教育のイスラム化に影響を及ぼすようになった背景などについて説明がなされた。アッタスはマレーシア出身のイスラム学者であり、ロンドン大学で博士号を取得した後、マラヤ大学に勤め、アンワールらの師として ABIM のイデオロギー形成の要になった人物でもあった。

次に、アッタスはこのような経歴を有するため、アズハルなどの主流のイスラム思想とも一線を画していることが指摘された。伝統的なイスラム指導者は現代に必要な知識に対して心を閉ざしている。西欧世俗主義の教育を受けた政治指導者と同様、彼らもまた偽の指導者なのであり、ムスリムは彼らに従っている限り信仰の確立も発展も目指すことができない、と批判したのであった。また、彼の著作の多くは英語で、しかも高等教育向けに記されている点なども特徴的であった。

その上で、アッタスの教育論について説明がなされた。彼はムスリム社会の混乱の原因を知の混乱に求め、近代的発展に必要な知識をイスラムに基づいて再編することが肝要であるとし、何がイスラムにとって正しい知識であるのかを判断する能力「アダブ」が必要であるとした。個々のムスリムが正しさを見極めることができれば正しい指導者を選び、社会を変革することも可能なのである。そして、このアダブを身に付けるのが教育の役割であるとしたのである。これは行為にあってスンナを重視する伝統的イスラムとは違い、むしろ人間の内面を重視するスーフイズム思想を取り入れるものとも評価できる。多様なイスラム

思想を取り入れた点でマレーシア的とも言える特徴のあるものであった。

このようなアッタスの思想はマレーシアの教育のイスラム化を考える際に重要である。後に文部大臣となるアンワールなどに大きな影響を与えた。もっとも、彼の思想は、一部で考えられているほどマレーシアの教育へ影響を与えたわけではなかった点も指摘された。アッタスは政府のイデオログとはならず、90 年代後半から世間から遠ざかっていった。これには、アッタスが「アダブ」は誰にでも身につくものではないという言わばエリート主義的な態度をとりつづけていること、マレーシア人の関心が社会の変革からその維持へと移りつつあることも関係しているかもしれない、とのことであった。

以上の報告に対しては、宮崎恒二氏から、アッタスはジャワ島で生まれ、その後転々としていたようであるが、そうした移動のネットワークは普通にあったのか、という質問が出され、イスラムの教育機関を移る慣行が存在する旨の回答があった。また、富沢寿勇氏からはイスラム化の定義はどうなるのか、アッタスの著書はどのような人々に向けて書かれたのかといった質問が出された。このほか、アッタスの思想とシーア派思想との関連はどうなっているのか、といった質問も出された。

最後に、山田悠未氏(豊橋技術科学大学大学院)から、新村の立地・形態などについて報告があった。まず、新村建設については、これまで非常事態宣言との関連が強調されてきたが、実はこれは長期的な国づくりの視野の上に立ったものでもあったとの認識が示された。これほど近代的な施設・設備・サービスを備えた居住区を全国

規模で大量にしかも短期間で建設し、しかもそうした新村の多くが現存し、地方の主要町村となっていることを鑑みるならば、住宅計画としては、東南アジア諸国全体から見て、成功した例として見ることさえできるとの指摘であった。

次に、当時の議事録、年次報告書などの分析から、当時、新村がどのように捉えられていたのか、新村の計画の背景、その目的などが示された。いわゆる不法占拠者問題は戦争に伴う中国系住民の移動によるものであり、それゆえに非常事態宣言の前から不法占拠者への処遇が検討されていた。また、単純な共産主義ゲリラ対策としてだけならば強制送還という手段があったにもかかわらず、再定住をはかったのは、不法占拠者がシンガポール・ジョホールにとって必要な農産物を生産していたため、これを国家に有益に取り込もうという意図があったのだ、との指摘がされた。1949 年のレポートにおいては、この再定住地が交通機関、警察、学校、店舗、診療施設、集会場、運動場、農地などを備えることで、コミュニティを組織することが企図されていた。イギリス植民地政府は新村を一時的な拘束キャンプとして扱われていたわけではなく、マラヤにおける新しい住宅計画の試みとしてこれをとらえていたのであった。

更に、手始めに建設され、最終的にも建設の多かったジョホール州の新村の立地・形態などについて具体的な例を挙げて説明がなされた。これらは森林部に散った華人を 500 人から 3000 人規模でまとめ集住させたものであり、そこには現在でも多くの華人が暮らしている。そして、新村以前(1947 年)、以降(1957 年)、現在(2000

年)の主要町村を総じて比較すると、1947 年から 1957 年にかけてはそれまでの状態を一変させるような変化があったこと、それらは新村による影響であったこと、また 1957 年から 2000 年にかけては大きな変化がないことが指摘された。新村は華人社会に大きな影響を与えており、地方住宅計画の一般的なモデルになったのではないかと報告がなされた。

以上の報告に対しては、原不二夫氏から日本軍による強制移住もまた不法占拠者の原因となっていたとの指摘があり、そうした日本軍による強制移住も新村建設に影響を与えたのではないかとの見解も出された。また、明石陽至氏からは日本軍による強制移住政策では華人ばかりではなくユーラシアンも対象となっていた旨、指摘がなされた。そのほかにもフロアーからは、もともとあった村が新村化したものもあったようだが、なぜそのようなことがおこったのかといった質問も出された。

いずれの発表もあまり試みられることのなかった新しい研究であるばかりでなく、地道な調査に裏付けられた研究であったと思う。マレーシア研究の裾野の広がりと深まりを、強く強く印象付けるものであった。前日の懇親会、二次会疲れにも拘わらず、2 日目早朝から出席者も多く、こうした研究への関心の高さも示された。

最後になりますが、このような大会を用意してくださった運営委員の皆様、会場を提供し準備に働いてくださった名古屋の皆様、御礼申し上げますとともに、愛知万博のご成功をお祈りします。